
守護天使な吸血鬼　～ ガーディアンなヴァンパイア ～

鴉合コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護天使な吸血鬼　〜ガーディアンなヴァンパイア〜

【Nコード】

N9686R

【作者名】

鴉合コウ

【あらすじ】

Smile Japan参加作品　野沢夏希が九条凧人に頼まれた仕事とは…。ちよつとあやしげな雇用主（♂）と口の立つ従業員（♀）のほのぼのの微ラプファンタジー？　ホラー度：ゼロ、流血度：献血レベル、糖度：1%未満。各話二千字（ルビ、空白除く）全7話完結。

1・雇用主な吸血鬼　くオーナーなヴァンパイアく

野沢夏希のさわ なつきが転職して1ヶ月。

その事実にして感慨を覚えるでもなく、夏希は淡々と洗い終えた体をタオルで拭いた。時刻は24時。これからが勤務時間だ。

清潔な夜着に袖を通す。頼み込んだので、ネグリジェでなくチュニックとズボンの上下だ。これも仕事着。

肩にかかる髪を丁寧に乾かし、化粧水と乳液を薄めに。あまりギトギトだと雇用主が嫌うのだ。香料もない。最初は化粧水すら拒否されたが、ゴリ押——交渉したのだ。自分の身は自分で守るのが独身女性の鉄則である。

鏡から覗く26よりも幼く見える女性から目を背け、夏希は仕事場に向かった。そこは西向き大きなテラスを備えた趣のある一間で、雇用主に与えられた私室でもあった。

中央の、クッションの並ぶ三人掛けソファの右端に腰を下ろす。

照明は落とされ、数個の蝋燭の灯が夜をあわく照らしている。

溶けた蝋が丸く滴りを作る頃、風と共に正面のフランス窓が開き、漆黒の影が現われた。雇用主の九条くじょう凧人なぎとだ。

白皙と呼べる顔立ちは、だが白というより蒼ざめて見える。宝冠のように頭部を飾る黒髪。長身を包む黒のロングコートは夜風に波立ち、すべてを圧して存在感を放つ紺玉の瞳は夜よりも深い。

「お帰りなさい、凧人さん」

「……ただいま」

ごく自然に出迎える言葉をかける夏希に、彼は低く応じた。乱雑にコートをむしりとる。夜を切り取ったごとく床に落ちるそれを見、夏希が眉を顰めた。

「ちゃんと掛けて下さいよ」

「後でする。——ほら、早く」

促され、夏希は仕方なく仕事に戻った。背中 of クッションを整え、

ソファに深く座り直す。そして合図の言葉。

「いいですよ」

最後の？よ？が言い終わると同時に、彼がソファに倒れ込む。足は反対側の肘掛け、頭は夏希の膝の上に。

「……疲れた」

溜息の混じる呟きが吐き出される。夏希は指先で凧人の乱れた黒髪を額から除けた。

「働きすぎですよ。今日はどうでした？」

「いつもと同じ、かな。でかい夜獣三匹」

「いつもと同じなら大丈夫ですね。お疲れ様です」

髪に指を通し、梳くように何度も撫で続ける。青白かった凧人の頬が、仄かに薔薇色を帯びた。人に戻る瞬間だ、と夏希はいつも思う。

「凧人さん、ちゃんと血は飲んでるんですか？ ……凧人さん？」

二度目の呼びかけに、膝上の男は閉じかけた瞼を嫌そうに持ちあげた。

「夏希はどうしても僕を？吸血鬼？にしたいんだな」

「同じようなものじゃないですか。ピルケース、見せて下さい」

「なんだか君、聖護院せいごういんに似てきた」

「彼に比べたら私なんて蟻ありんこです。ほら」

しぶしぶ凧人が、上着の内懷から財布大のケースを取り出す。右手はそのままに、夏希は器用に左手でケースを開けた。特殊な四重構造を持つそこから白く冷気が立ち昇る。

「1個しかカプセル減ってないじゃないですか。せつかく人が痛い思いしたのに」

「普通そこは採血の回数が減って喜ぶところだと思うけど？」

「ナマモノは鮮度が命ですよ。MOTTAINAIは日本の心です」

「勿体ないから少しずつ」

「本末転倒なこと言わないで下さい。気を遣うんなら、きちんと体調管理して私の仕事を減らしてくれればいいんです」

ケースを閉じ、文句を言いつつも夏希の右手は動きを止めない。
なでなで。

「第一この方法じゃ回復に時間がかかるって、凧人さんが言ったんですよ?」

「そうだけど」

凧人は目を閉じ、体を丸めて横を向く。白い指の間から、するりと闇色の髪が逃れた。

「なんで、他人の体内成分から補わないといけない力なんて在るんだろう?」

体内成分。つまり血液、体液、唾液、涙、汗、そして呼気。凧人は夏希の息と皮膚から蒸散されるわずかな水分により、失った?力?を補充しているのだ。

「夏希。僕が、怖い?」

「怖くない雇用主なんていませんよ。でも」

夏希は手を伸ばし、再び彼の髪に指を滑らせた。なでなで。

「私、わりとこの職が気に入ってるんです。雇用主は我が儘ですが、お給料は前の倍は頂いてますし。住み込み必須とか時代錯誤も甚だしいですが、生活保障は充分ですし有休も社会保険もついてますし」

「……評価と非難を一緒にするのは止めてくれないかな」

「見張り役の彼は全く気に入りませんが、貴方を心配することにかけては私と並ぶくらいですから」

紺玉の瞳がやや驚いたように夏希を仰いだ。

「膝枕はいつでもしますし、献血だって平気です。だけど、每晚倒れるように帰ってくる貴方を迎える身にもなって下さい。私……いつも」

夏希の声が震えた。凧人は彼女の瞳に浮かぶ雫を拭い、愛しむように、指先に載ったそれを舐めとる。

「凧人さん」

「ん?」

「それは、別料金です」

ぐす、と鼻を嚙りながら告げられた言葉に、凧人は血色の戻った顔をやわらかくほぐした。

「君の商魂には感心するよ」

「せめて仕事魂と言って下さい」

「では、仕事魂の立派な夏希さん。僕はもう寝るよ」

「はい。お休みなさい」

その声にもういちど微笑み、凧人は目を閉じた。

「……お休みなさい、凧人さん」

2・純和風な吸血鬼　くジャパネスクなヴァンパイアく

出逢いは偶然だった。路駐していた凧人の乗った黒塗り高級車に、夏希がママチャリで突っ込んだのだ。原因は、妄想の世界へ旅立ちがちな夏希の完全なる前方不注意である。

時刻は逢魔が時。直前で車に気付いた夏希は、避けようとして結果、芸人も嫉妬するほどの見事な一人転倒をみせた。

すぐに後部座席にいた凧人が降りて心配の声をかけてきたのだが、夏希がすり傷のできた手を見せた途端、態度が豹変した。

彼女の手首を掴んで引き寄せたと思うと、その手をぱくりと食^はんだのである。動物さながら丹念に傷を舐め、彼はおもむろにこう尋ねた。

「君、何者？」

「……それは全くこちらの台詞です」

多分、いやおそらく。夏希がことあるごとに凧人の言葉に突っ込んでしまうのは、この出逢いがきっかけであるといっても過言ではない。

笑いが漏れたのか、こぼれた息が前髪にかかり、膝上の男が薄目を開けた。

「なに？」

「いえ、最初に逢った時のことを思い出して」

「そんなに楽しい出逢いだった？」

「だって凧人さん、いきなり？君、何者？？って訊いてきたんですよ？ あ、今は凧人さんの普通を知ってますから、それが当然の反応なのは分かりますけど。あの時は、何も知らなかったから」

『——君の力を僕に分けて欲しい』

「白昼堂々あんな台詞を言えるのは、日本広しといえど凧人さんくらいですよ」

「そういえば君は、あんまり僕を怖がらなかったな」

「驚きが先で。でも、怖くはなかったですよ」

「この眼も？」

夜よりも深い紺玉の双眸が、夏希を至近で見上げる。

「ハーフかクウォーターだと思っただんです。碧眼はありでしょう？」

「僕は生粋の日本人だよ」

「その足の長さで、どの口がそう言いますか」

「日本人離れとか言われても、元がこうだからよく分からないな。

居合も古武術も日舞もお茶もお花も書道も物心つく前から習ってるし」

「凧人さんはおぼっちゃんでしたね」

「家に纏わりつくものが大きいだけだよ」

簡潔に答える凧人の声は硬い。

彼はここ神籬市ひもろぎの旧家の跡継であり、一族の総帥という立場である。その一族とは特殊な力を持ち人々を災いから守るという、なんとファンタジックな極秘の血族なのだ。

力は血によって受け継がれ、直系の？九条？がもっとも強力だ。

その力を発揮できるものを？流神りゅうじん？と呼び、逆に力をもっても充分に発揮できないものを？止神しじん？と呼ぶ。

凧人はこの流神のうち最強の存在であり、夏希は——本人に全く自覚がないが——その対極とも言える最強の止神なのである。ちなみに凧人との血縁は0.006%程度。この出逢いがなければお互い知ることなかった間柄だ。

流れ出す力は睡眠や力の満ちる場に行くことによって再び充填できるが、簡単に身近な回復法が力持つものの体内成分の摂取だ。

力の枯渇していない流神からも力はもらえるが、力を溜め込む止神からもらうほどに効果はない。そこで、夏希の登場となるのである。

——力、ねえ……。

じっと空いている手の平を見つめる。こじんまりしたそれは、何

ひとつ特別には見えない。毎夜凧人が命をかけて戦っている相手も、夏希は視ることができないのだ。

ただ分かるのは、帰宅した凧人が疲労しきっていることだけ。

「夏希。何を考えてる？」

「いえ、凧人さんの着物姿の妄想を」

言葉が途切れ、夏希の指から零れるさらさらという髪之音が沈黙を埋めていく。

「うん、似合いそうです。袴はかまより着流しがいいかな」

「僕は夏希の着物姿が見たい」

「着ましようか？ 着付けが大変なので特別手当を請求しますけど」

「特別手当を出せば何でも着てくれるの？ セーラー服とか」

「へん々」

言いかけた夏希の頬を、凧人の指が摘んだ。

「正常な青年男児の嗜好だよ。ナース服も捨てがたいけど」

「今すぐ即刻、膝枕外してもいいですか」

「職務放棄する気？」

聞き返され、夏希はうう、と呻きつつも、髪を撫でる手を再開させた。なでなでなで。

「なんで男の人の好みって偏るんですかね。髪を切ったら？ 長いほうがよかった？ とか、ピアス開けたら？ そんなことする子じゃないと思ってたのに？ とか」

なでなでなでなで。

「ハイソックスはよくてレギンスはダメとか、タイツはダメでストッキングはOKとか、スカートはタイトかラップがいいとか！」

なでくりなでくりなでくりなで——。

「……夏希。僕の髪、すごいことになってるみたいだけど？」

語りに力が入りすぎて、撫でるほうも勢い余ったらしい。鳥の巣のようにもつれた凧人の頭を、夏希は慌てて手櫛で直した。

癖はあっても絡まりにくい黒髪は、すぐに元のように指間を滑りぬける。

「夏希。さっきの話を言ってきた相手って、誰？」

「前職の同僚ですよ。いろいろうるさい男で」

「ふうん。じゃあ、今はもう逢うことはないね。よかった」

「何がですか？」

「……いや。そろそろ寝ようかな」

「喋りすぎましたね」

「ふうん。お休み、夏希」

告げる声が焦点を失ってぼやける。夏希はそっと微笑んだ。

「お休みなさい、風人さん」

3・菜食主義な吸血鬼　くヴェジタリアンなヴァンパイアく

「食事嗜好について疑問なんです、 凧人さん」

「いきなり固いね、夏希」

「硬いのは話ではなく、この人参スティックです！」

「ばきん、と威勢よく手にした人参を前歯で折り、夏希は声高に主張した。」

珍しいことに雇用主とのランチタイムでの会話である。

「有機栽培の金時人参なんだけど。硬いけど、味は濃くて美味しいよ？」

「ええ。私は一般庶民ですが、ここの食材が選び抜かれた物ということは分かります。問題は種類です」

凧人は、ぽりぽりと上品かつ澱みなく赤みの強い人参を噛み砕きつつ、食卓を見渡した。

スティック状に切られた金時人参とセロリに胡瓜。全粒粉で作ったブラウنبレッドに、ベーグルはプレーンとバジル入りだ。付け合せにスライスした玉葱とトマト。専門の農家から仕入れた生乳バターもある。

スープは南瓜のポタージュに生姜を加えたもの。さらに金時人参・ブロッコリー・ジャガイモ・パプリカ・ズッキーニをオリーブオイルで炒めた温野菜の盛り合わせまで揃って、色とりどりの食卓模様である。

「ああ、茸があればよかったね」

「そうではなく」

「じゃあ海草？」

「いえあの、栄養バランス的に蛋白質が全く足りてないです」

「朝と夜は豆腐も納豆も味噌汁もあるし。湯葉も食べるよ？」

「動物性蛋白質はないんですか？　せつかくお金持ちなんですから、飛騨でも松坂でも好きなものをお取り寄せすればいいじゃないです

か」

「肉が食べたいんならそう言えばいいのに。今から仕入れさせるけど？」

「私が食べたいんじゃないです。凧さんが食べるべきだって言うてるんです」

ぽり、と人参の欠片を口に押し込み、凧人は前に座る夏希に困惑した眼差しを向けた。

「日本男児たるもの体力が肝要です。牛でも豚でも鶏でもガツンと食べて栄養を——」

「野菜、好きなんだよね」

がつくりと音が聞こえる勢いで、夏希の肩が落ちる。

それを見て、どこか嬉しそうに凧人は頬を緩め、ワイングラスに並々と注がれた真紅の液体に口をつけた。ダークスーツに身を包み、真昼でも夜の空気を纏う男にそれはこの上なく似合う——厳選された高知県産高級トマト100%で作られた、フレッシュ・トマトジュースである。

真紅の飲み物を手に、白晢の雇用主は微笑と共につけ加えた。

「それに僕には夏希がいるから」

「——だから、あんまり当てにするのもどうかと思うんですよ」

「そう言われても」

「過信しちゃダメですよ、凧さん。力を使いすぎて発毛に影響したらどうするんですか？」

夜、夏希に髪を撫でられながら、凧人が顔をしかめた。

「やけに限局的だね」

「老化というやつぱり」

「過信してるわけじゃないよ。だけど……相手が多すぎる」

凧人の口から吐息が漏れる。毎夜行われる極秘の戦いについて、愚痴を言うことなど滅多にない。

「夏希。この仕事が嫌なら——」

「雇用契約は1年ですよ。再就職後1ヶ月で就活なんてごめんです。まあ、もっと効率的な方法はないのかとは思いますがね」

「……ないこともないけど」

紺玉の瞳が、吸い込まれるほどの深度を帯びて夏希を見た。腹部に乗っていた広やかな手が肩で揺れる栗色の髪に絡む。

「夏希が許可してくれるなら、僕は悦んで応じるよ?」

「28才の青年男児としては正しい反応かもしれませんが、雇用主としては最低です」

夏希は空いている指で、その手の甲をぎゅっと抓る。

「私が言ってるのは、髪の毛とか爪ってことです。体で作られるものだから同じような効果があるかと」

「僕に君の髪の毛を飲めって?」

「爪の垢を煎じて飲むとか言うでしょう」

「君の口の悪さがうつりそうだな」

「聖護院さんに言い返すチャンスですよ」

「それは諦めた」

「諦めるなんて貴方らしくも——」

言いかけた夏希の口を、ふいに凧人の唇が塞いだ。腹筋を使って起こされた凧人の上体は、やすやすとソファに座る彼女の upper body につき、押しつめる。

凧人はわずかに開いた夏希の口腔を舐め、ちゅう、と音をたてて唾液を吸いとった。

「ご馳走様」

「ベ……ベジタリアンなのに、突然肉食にならないで下さいっ」

仄明かりでも分かるくらい顔を真っ赤にして夏希が怒る。凧人はくすりと笑って、膝に頭を戻した。

「だって、この状況でその格好であんなことを言われるとね?」

「力を与えるには通気性のいい服をつけて寝間着を指定してきたのは、あなたの優秀な第一秘書の聖護院大氏（せいごういんおほうぢ）ですよ!」

「僕も最初はどうかと思ったけど……今は、良かったと思ってる」

力を帯びたせいか、凧人の瞳が妖しい艶めきを帯びている。夏希が見惚れた瞬間、素早く凧人が、もういちど軽く唇を吸った。

「もう、元気になったんなら寝て下さい！」

夏希は背後からクツションを引き抜いて、膝上の顔面に振り下ろす。

「日本男児たるもの体力が肝要って言ったのは夏希だよ？」

「いいから寝て下さいっ！」

クツションの上から拳でぼすんと殴る。くぐもった凧人の声が、笑いを含んで聞こえた。

「お休み、夏希」

「……お休みなさい、凧人さん」

4・紳士的な吸血鬼　くジェントルマンなヴァンパイアく

最初から今のような勤務形態だったわけではない。

偶然の出逢いの後。彼らの説明にまるで懐疑的だった夏希は、風人の切羽詰まった様子と彼の秘書・聖護院大の獲物を見つけたような雰囲気圧され、数日の試用期間を承知した。その際の条件は、
？できるだけ肌を露出した服装であること。

？肌表面は清潔に保つこと。化粧品も避けること。

？風人の状態が落ち着き、完全に休息するまで傍についておくこと。
以上である。勿論これらは後に若干の変更を加えられることになったが。

初日。蝋燭の明かりの中、夏希はミニ丈のネグリジェという格好で、落ち着かなく蒼い闇に染まるフランス窓を眺めていた。

室内でも底冷える早春の夜である。夏希は震える体を擦りつつ、万が一を考え、金属製の大きな蝋燭立てを近くのテーブルにそっと引き寄せた。

そのとき、真つ黒な影が窓を覆い、一息に解き放たれた。髪の毛まで凍えそうな夜気が風と共にだれ込んでくる。

驚いた夏希は、その場に現われた男を見て二度驚いた。黒のロングコートを纏った彼は、数歩こちらに向かいかけ、いきなり前へと崩れ折れたのである。

夏希は悲鳴をあげ、思わず彼の体を抱き止めて、一緒に床に倒れこんでしまった。

尻もちをついたまま、お腹の上に乗った青年を見る。宵闇のせいだとは思えない顔色と体温。閉じた瞼。

「九条さん、大丈夫ですか！　起きて——」

言いかけ、ためらう。仕事は、彼が休息に就いたら終わりではないのだ。それでも、今の彼の状態は絶対に？落ち着いて？いる様子ではなかった。拳を握る。

「起きて下さい、凧人さん。起きなさいっ！」

夏希の平手が凧人の頬に命中する音が、夜空に高く響き渡った。

「なぜそれが？膝枕？につながるのか、いささか理解に苦しむんですよ」

そう言ったのは、現在の勤務形態について話を振ってきた男、聖うごいん まさひめ護院大である。

夏希は左腕を固定された体勢で、目だけを大柄なその彼に向けた。
「だから凧人さんを起こしてソファに連れて行ったのはいいんですけど、放してくれなくて、譲歩した結果が膝枕なんです」

「膝枕以外にもっと効率的な方法があると思うのですがね？」

「こうやって、できるだけ協力してるじゃないですか」

「それには感謝しているのですが」

大が、脇に置かれた台の上でモーター音と共に攪拌される献血バッグをちらりと見る。これは今から特別に処理されて凍結乾燥粉末フリーズドライ化して保存され、カプセルとなって雇用主の元へ運ばれるのだ。

「野沢夏希さん」

「何でしょう、聖護院さん」

「凧人様はかけがえのない存在です。凧人様のためなら、私は何でもいたします」

凧人よりも一段低いバスの声音は、彼の外見と同じく感情が全く見えない。

「あなたに会う前、弱っている凧人様に、思い余ってこの身を差し出したことがあります。ところが」

『——聖護院。僕は、他人の命の一部を得てまで命永らえることが本当に正しいのか分からないんだよ……』

「そう言って泣かれてしまいました。凧人様はそういう方です。ですから」

語を切り、大は強い眼差しで夏希を見つめる。

「お願いです。一時の同情で手を差し伸べるのなら、これ以上凧人

様のお気持ちを乱さないで頂きたい。あの方にとって、あなたが少しばかり特別であることは認めます。ですが、あの方の背負っているものの全てを受け入れる御覚悟がないのであれば、雇用主と従業員の関係は守って頂きたいのです」

よろしいですね？という大の念押しに、夏希の答える声はなかった。

「どうかした？ 夏希、なんだか元気がないけど」

「……昼間、献血したので」

凧人がかすかに舌打ちをして横を向いた。夏希の手がその髪を追い、撫でる。

「ちゃんと聖護院さんには宮城県産の高級牛タンと会津産の厳選コシヒカリをたんまり要求していますから」

「ごめん」

「謝らないで下さい。農家の方の血と汗の結晶を頂く私も、凧人さんと一緒にです。それに肉も野菜も私も、元を正せば同じ命ですから」

夏希の膝の上で、凧人の息が流れる。笑ったのか溜息なのか、夏希からは分からない。しばらく黙って髪を梳き、ふと夏希は彼の肩についた数本の短い毛を見つけた。

「猫ですか？」

「……子犬」

むつつりと返された答えに、夏希の口元が綻ぶ。

「で、今度は何て聖護院さんに怒られたんです？」

「？動物を救助する余裕がありなら、なぜその余力をご自身の体力の温存に使うという思考に至らないのか全く理解しかねます？」

夏希の笑いが、凧人にも伝わる体の揺れとなる。

「やっぱり爪の垢、混ぜておきましようか？」

「いらない。夏希が朝まで一緒にいてくれたら、それでいい」

「残念ながら、それは雇用契約外です」

凧人が寝入ったら、今いるソファはボタンひとつでベッドに変わ

るのだ。夏希は離れた別のベッドで眠る。

「じゃあ、このまま起きておこうかな」

「このまま素直に寝るとカプセルを飲むの、どちらがいいですか？」

「……寝る」

「はい、お休みなさい。凧人さん」

「お休み、夏希」

5・心理療法士な吸血鬼　くセラピストなヴァンパイアく

「具合はどう？　なっちゃん」

「平気です。二度目ですし」

日課の検診にやってきた看護師に、夏希は夜着のままベッドに座って答えた。

九条に連なる一族の出である年上の女性は、心得顔でにこりと笑う。

「献血、なっちゃんが言い出してくれたんだって？　ありがとね」

「いえ、役に立ってるかどうか」

「勿論よ。夙人様が寝込むこともなくなっただし、あたしも仕事が楽になって万々歳」

「そんなに酷かったんですか」

「まあ、ね。若いから調整が下手なのよ」

彼女、柊野ささぎは、幼い頃から夙人ひひろの健康管理を担ってきた一人である（年齢に触れるのは鬼門である）。夏希にとっても姉のように頼れる存在だ。

「あの……ささぎさん。？夜獣？ってどんなものなんですか？」

カルテをつけていた手を止め、ささぎは細い眼鏡の向こうから夏希を見た。

「大様から説明は？」

「受けました。？人や生き物の負の部分、気の澱みから生まれる闇の生き物？だと。でも、私には何も見えませんから」

「視えないから信じられない？」

「視えないから存在しないとは思いません。私が見分けないのは、なぜそんな相手に夙人さんが戦い続けないといけないのかってことです」

ささぎは腕を組み、くせのあるボブの髪を揺らして少し考えるようにした。

「実は夜獣は全く視えないわけじゃないの。——ね、なつちゃん。この世で一番恐ろしいものは何だと思う？」

脈絡を欠いたような問いに、夏希は戸惑った。無言の返答を待ち、ささぎが続ける。

「人の心、よ」

「こ、ころ？」

「そう。下手な少年漫画みたいでしょう？ でも真実。人の心ほど恐ろしくて救いようがなくて、愚かで壊れやすいものはないわ」

グロスを塗ったささぎの唇が、憐れむような微笑を湛えた。その視線が室内のテレビ画面に向かう。天災と人災——近くて遠い、だが確かに誰かの大切な人が傷ついた光景が映し出されている。

「みんな表には出せない感情を抱えて生きているわ。特に今はこんな状況だしね。不安、恐怖、猜疑心、恨み、妬み……恐ろしいまでの負の感情が入り乱れているわ。いくら本人が感じていないと思っても、心の奥に溜まったその感情は無意識のうちに——多くは夜寝ている間に放出されるの。それらが寄り凝って力を得たもの、それが夜獣よ」

「じゃあ」

「そう。つまり夜獣は、誰の心にも棲んでるってこと。これを放っておいたら、人は喰われてしまうの。がっぷりと、心をね」

負に心を喰われた人がどうなるか——それは想像できるようでもあり、想像したくない光景でもあった。

「風人さんは、セラピストみたいなものですか？」

「力を使ってなぎ倒すのがセラピーかと言われると、ちょっと違うけど……近いかもしれないわね」

ささぎは腕をほどき、夏希の座るベッドの隣に腰掛けた。

「実を言うと夜獣狩りを止めたらどうなるか、正確にはあたしにも分らないの。夜獣は狩っても狩ってもすぐに現われるからね。ほんと元凶からどうにかしたくなるくらい」

元凶というと、つまりは人である。看護師らしからぬ乱暴な発言

をして、ささぎは少女のように肩をすくめる。

「だけど、凧人様はこうおっしゃるの。夜獣は人の影だから、人から夜獣を全て失くしてしまったら、それはもう人ではなくなるだろうと——そんな完璧は不自然すぎると」

ささぎの手が夏希の手に軽く添えられる。

「人は足りなくて無力で未熟で、でもそのせいで誰かと繋がれるんだわ。あたしたちの中の夜獣は、誰かと繋がっている証なのよ。だから流神は、力で夜獣を闇に還すの。悪夢を消し去るように、誰一人知らない間にね」

「でも、それじゃあ」

「そう。流神の役目が評価されたり、感謝されることはないわ。本当は九条の表の事業に力を入れてどこかへ多額の寄附をしたほうが、よほど社会的効果は大きいだよ。でも、凧人様はそうしない」

息を吐き、ささぎは囁くように告げる。

「事業は誰にでもできる。だけど、夜獣を倒すことは自分にしかできないからって」

いつの間にか夏希の目には熱いものが滲んでいた。零れかけるそれを、服の袖で拭う。

「もったいないって、凧人さんに怒られちゃいますね」

「泣かせたことを怒られそうだわ。今の話、凧人様には内緒ね？」

「はい」

「なっちゃん、凧人様をよろしくね」

「……」

「荷が重いわよね。だけど、みんなの負を一身に背負う凧人様を癒してあげられるのは、なっちゃんだけだから」

「……癒してあげられているんでしょうか」

その言葉に、ささぎはやさしく両目を細めた。

「当たり前じゃない。だって、そうじゃなきゃあなたの膝の上であんなに安らかな寝顔、見せたりなんてしないでしょう？」

今日も、夏希は深夜の勤務を始める。体を清め真新しい夜着を着て、ソファに腰掛けて彼の帰りを待つ。

真っ暗な闇を背負って生きる男のために。その彼に、この言葉がけるために。

——夜気と共に、窓が開け放たれる。

「お帰りなさい、旦那さん」

そして、彼に束の間の安息をもたらすために。

6・守護天使な吸血鬼　くガーディアンなヴァンパイアく（1）

友達に会つと、夏希はいつも仕事の説明に困る。

さすがに両親は系譜の端とはいえ？九条？のを知っていて、

「おまえが止神だったかー」程度で済んだのだが、内容が内容なうえに扱いは極秘だ。

なので、表向きは？住み込みで九条家の看護師手伝いをしている？と言っていた。九条グループは製薬会社を傘下にもち、医療分野の研究を広く手がけているのだ。

ところが。

「ねえ君、九条風人に軟禁されてるって本当？」

久々に顔を出した合コンの席で、そう耳元で訊いてきたのは法連ほうれん聰介。そうすけ雑誌社に勤めるといふ爽やかな雰囲気ふうきの年上の男である。もちろん初対面。

夏希は嘖き出しそうになったウーロン茶をこらえ、思いきり気管に入れてむせた。

「ごふっ……ち、違います！　だ、誰からそんな話を」

「守秘義務があるから、ごめんね。あ、愛人っていう情報もあつただけど」

「ぶっっ」

「でも君、数いる彼の愛人たちとは雰囲気ふうきが違うから、それはないと思つて」

「愛人も軟禁も、昼メロっぽいことは何ひとつないです」

「君、素直そうだから騙されてるのかもしれないよ。ストックホルム症候群ストックホルムしこうぐんって知ってる？」

「残念ながら、ご期待に添えるような心身の危険にあつたことはありません」

きっぱり否定すると、夏希は聰介に背を向け、合コンの間中ウーロン茶をあり続けた。

だが敵も然る者。合コンを終え、居酒屋を出た夏希の前に彼は再び現われた。

「夏希ちゃん。二次会行かないの？」

「仕事がありますので」

「じゃあ送るよ」

「バスで帰ります」

「バスはもう終わってるし。送るよ。九条なら、歩いて15分だしね」

旧家である九条家は、隠しようにないほど巨大な邸宅だ。神籬市の土地の半分を所有していると、まことしやかに噂される。

歩くこと5分、九条の敷地を示す鳥の子色の土塀が見えてきた。

ここからが長い。

夏希は無言で聰介の後をついて歩き、土塀の途切れた一画で足を止めた。そこは九条家の裏門。夏希の仮住まいである、大正の香り漂う洋風の別館への入口だ。

「ここです。送って下さってありがとうございます」

じゃ、と夏希は手を上げ、その手首を取られる。

「夏希ちゃん、やめなよ。こんな仕事、君に似合わないよ」

「かも、しれませんが。でもそれを判断するのは、私でもあなたでもないですから」

「まさか君、騙されてもいいとか言うんじゃないよね？ もっと自分を大事に——」

「してますよ。自分なりに考えて、仕事内容は交渉してきたつもりです」

「何人の女性が、九条風人のせいで泣いたと思う？」

「……知りませんし興味ありません」

「そう？ そのわりに動揺してるようだけど。……君も、彼に力を与えてるの？」

「！」

逃げようとする夏希を、聰介が強く引き寄せる。

「君一人で、毎晩気絶するほど衰弱する九条凧人を回復させられると思う？ その君は力を与えて、どうして何もしないで平気なのかな？」

「だけど、この仕事は私じゃないと……」

「それが騙されてるっていうんだよ」

ぎりぎりと手首を締め付けられ、夏希は顔を歪めた。

「法連さん、離してください。仕事に行かないと」

「誰も行かせないよ、あんなやつのところになんか」

「離してください。仕事に理解のない男は最低です」

「じゃあ聞くけど、あいつの命は君が守る。君のことは——誰が守るの？」

切りつけるナイフに似た問いに、夏希は言い返す声が出ない。代わりに、

「——夏希は、僕が守る」

夜の底から滲むように、甘いテノールが響いた。夏希の背後の闇から伸びた青白い手が、聰介の腕を掴んで引き剥がす。

夏希は夢でも観ている顔で、後ろをふり返った。黒のロングコート。蒼白の顔立ちに紺玉の双眸が妖しく輝いている。

「凧人、さん。まだお仕事中じゃ」

「夏希の声が聞こえたから。怪我はない？」

果物でももぐように男の手を振り捨て、凧人が尋ねる。傍に立っているだけだというのに、それは深く抱き締められるほどの存在感だ。

凧人は夏希を背に庇うように進み出、鋭い眼差しを突きつけた。

夏希もつられて視線を追い、聰介の背後のそれに気付く。

宵闇が一段濃くなった、もわりとした何か。肌が粟立つ違和感をもつそれが、そこに居た。

「この男の邪気に惹かれたか。——聖護院」

夜風が忍び寄ることく、黒服を纏った長身の男が現われる。

「結界を頼む」

「御意」

「夏希はここを動かないで。君のことは僕が必ず守るから」

「——この子……あんたの何なんだよ？」

気圧されながらも発された聰介の問いに、凧人はふつと微笑を浮かべた。

「さしずめ、空気かな」

「は？」

「夏希がいなければ、僕は生きていけない」

夏希は固く目を閉じた。どんな言葉よりも、その一言が心に沁み
た。

何か言いかける凧人に、夏希は首を伸ばし、顔を近づける。震え
ながら湿った唇をつけると、万感の想いをこめて囁いた。

「行つてらっしゃい、凧人さん」

「……うん。行つてくる」

そうして真つ黒な闇の翼を翻し——誰にも知られることのない戦
場へと、凧人は飛び出していった。

7・守護天使な吸血鬼　くガーディアンなヴァンパイアく（2）

結局、法連聰介はかつて凧人に力を与えていた一族の女性の元恋人で、彼女から夏希の存在を聞いて勝手に義憤を覚えたらしい。はた迷惑な思い込みである。

もちろん彼女の洩らした情報は極秘であり、その女性にも聰介にも？九条？での制裁が科せられた。

「制裁？」

「せっかく若い労働力がただで手に入るってことで、うちの研究所で働かせるんだ。内容は聖護院の好みだから、僕には分からないけど」

「なんだかとてもマッドサイエンティストな香りがします」

「うん、否定はしないね。この前は笑い苺で香水を作るのだったかな。一吹きで最長12時間笑い続けるとか」

「聞くだけで笑いが冷めそうな話ですね」

「テレビ局のサクラ用に売り出すんだって」

「CGで合成するほうが早いと思いますけど」

「僕に言わないで聖護院に言つてよ」

「そんな恐ろしいことはできません」

相も変わらないの膝枕での会話は、やはり相も変わらずゆるい。だが今までと違うのは、精進料理も真つ青な豪華野菜ディナーの後のことであり、凧人の顔色も落ち着いているということだ。

夏希が慣れた手つきで、彼の髪を指で梳いていく。

「髪、伸びましたね」

「切ってもらおうかな」

「私ですか？　へたくそですよ。ほら、前髪もがたがたで」

覗き込むようにして前髪を引っ張る夏希に、凧人が顔を起こして唇を重ねた。すぐに耳まで赤くなった夏希は、だが逆らわず彼の頭に腕を回す。言葉の要らない会話がしばらく続いた。

「な……なぎと、さん。呼吸の限界です」

「世界記録は32時間らしいよ？」

「すでにキスじゃないですよ、それ」

「トイレが問題だね。挑戦してみる？」

「確実に何かが失われそうなので止めておきます」

「そう、残念」

冗談でもなく言い、凧人は赤く濡れた夏希の唇をぺろりと舐める。

「美味しい」

「……貴方は一度味覚を検査してもらうべきですよ」

「いい加減、人外扱いやめてくれないかな」

「なんだかもう実は血液が緑とか、角生えてるとか言われても驚きません」

凧人が？吸血鬼？のような想像上のものでないことは、夏希も分かっている。だがあの日、闇夜を飛びぬけて夜獣狩りに出かける彼は、充分人知を超えた存在であった。

「あんなところを見せたら怖がると思ってた」

「怖かったですよ、状況的には。でも、凧人さんが守るって言うてくれましたから」

「じゃあその……僕がどんなやつでも、夏希は傍にいてくれる……？」

目を逸らし、自信なさげに尋ねる凧人に、夏希の胸がきゅうと痛くなった。髪を撫でる手を再開させる。なでなで。

「私こういうのって、あまり慣れてなくて。それにうまく言えないんですけど、私、凧人さんをちゃんと支えたいんです。凧人さんは守ってくれるって言ったけど、私は貴方を守りたい」

「夏希」

「だから、この仕事をきちんと全うしたいんです。九条のことも勉強したいし。で、その……関係は、その後で進めるってダメですか？」

「あと？」

「雇用契約終了後、です」

「……まさか11ヶ月後？」

呪文でも唱えるように、凧人が呻く。

「なんだか待っているうちに解脱げだつしそうだ」

くすりと笑う夏希の頬を、凧人が悔しげに摘んだ。

「その間に心変わりしたら、相手の男に100倍濃縮の笑い草エキスを振りかけてやるから」

「変わらないですよ」

「なぜそう言いきれるの」

「私、毎日好きな人ができるんです」

「え……？」

「ここで夜、こうして座って待っているでしょう？　すると目の前の窓から黒いコートの青い目をした、ちよつと天然気味の彼が現われるんです。そのたびに私、毎日どきどきして、ああこの人が好きだなあって思ってしまうんです。それが毎日続いたら、きっと他の人に心移りしてる暇なんてないですよ」

でも私が心移りされちゃうかな、と小さく呟く彼女に、凧人は上体を起こして、もう一度深いキスをした。

「僕も、毎日君が好きになる」

「凧人さん」

「だけど11ヶ月の約束は絶対に縮めるから、覚悟してて？」

何を企んでいるのか、そう言つて笑顔を浮かべる凧人に、夏希の背筋がかすかに凍る。

口を開こうとした夏希は、ふいに紺玉の瞳が鋭く変化し、闇へと向けられるのを見た。

「——来たか」

「いつもの、ですか」

その名前は怖くて口に出せない。それでも、彼がどんな相手にも正面から立ち向かうことだけは揺るぎなく信じている。

見えない敵。消すたびに生まれる、負の澱が成す存在——夜獣。

人の、心。

「行つてらっしゃい、凧人さん」

「行つてくるよ、夏希」

真つ黒なコートを翼代わりに纏い、彼は今夜も終わりになき戦いに挑みゆく。

そして？待つ？という夏希の試練もまた、続いていくのだ。

すべての人が、すべての大切な誰かに「お帰りなさい」と「お休みなさい」を言えるように。

彼とは同じで違う決意を胸に秘め、夏希は小さく繰り返した。

「——行つてらっしゃい」

あなたの休息の場所を、ここで確かに守りぬくから。

あなたの帰る場所はここにあるから。この膝に腕に胸に、心に。ずっと。

FIN .

7・守護天使な吸血鬼 くガーディアンなヴァンパイアく(2) (後書き)

BGM: 絢香「おかえり」

<あとがきに代えて> 2011.8.22 追記

読了ありがとうございました！

いろいろ設定はあるのですが、基本かるい話になっております。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、

Smile Japanということで、登場人物は全員「野菜」です。

野沢夏希(のざわなつき) ↓ 野沢菜

九条凪人(くじょうなぎと) ↓ 九条ネギ

聖護院大(しょうごいんまさる) ↓ 聖護院大根

柊野ささぎ(ひらぎのささぎ) ↓ 柊野ささげ(細長い豆の種類)

法連聰介(ほうれんそうすけ) ↓ ホウレン草

流神系は京野菜でまとめてみました(笑)。

みなさま、野菜しっかり食べましょうね？

日本ガンバレ！ 野菜もガンバレ！！ということ。

お目汚しでございました。

それでは、鵜合コウでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686r/>

守護天使な吸血鬼　～ガーディアンなヴァンパイア～

2011年10月11日03時20分発行